

Libro de Alexandre (VII)

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The Libro de Alexandre is a great epic poem consisting of 10,700 lines, supposedly written in the first third of the thirteenth century. This poem is not an ordinary biography of Alexander the Great, because the story is interrupted by many diverse episodes like that of the Trojan war, which took place about 1200 years B.C. according to historians, and that of the Bible. Alexander the Great is a personage of the fourth century B.C., and this poem was written in the thirteenth century A.D. So in this work by an unknown author, perhaps a cleric, mixture of ages is seen everywhere, and that is the most remarkable characteristic of this epic poem.

This work is written in the erudite form of *cuaderna vía* (the four-fold way), a style of which has been called *mester de clerecía* (scholars' art) as compared with *mester de juglaría* (minstrels' art).

This time translation is made from the strophe 1187 to 1372.

アレクサンダーの書 VII

太田 強 正 訳

アレクサンダーの書は 13 世紀の最初の約 30 年の間に書かれたと推測される 10700 行からなる大叙事詩である。

これは 33 歳で早世したアレクサンダー大王の伝記であるが、普通の伝記とは異なり、大王が活躍した紀元前 4 世紀、トロヤ戦争が起こったと言われる紀元前約 1200 年、そしてこの叙事詩が書かれた紀元後 13 世紀の話が混然として描かれている。

作者は無名の聖職者であろうと言われているが、Gautier de Chatillon の *Alexandreis* を底本として、その他の伝記、伝承を基にこの叙事詩を書いたようである。

作品はメステル・デ・クレレシーア (*mester de clerecía*) と呼ばれるもので、中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派のものである。これは文字の読み書きのできない吟遊詩人 (*juglares*) によるメステル・デ・フグラリーア (*mester de juglaría*) と対をなすものである。

形式はクアデルナ・ビーア (*cuaderna vía*) と呼ばれる 1 行 14 音節同音韻 4 行詩である。

今回は第 1187 連から第 1372 連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなければならない箇所があった。

人名・地名などの固有名詞は原則、原文に従いスペイン語読みとし、日本で普通用いられているものについてはそれに従った。

翻訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳ではあるが日本語訳も参考にした。

1187 ペルシャの皇帝は敗れた後

ふさわしくなかったので、決して休息できませんでした
残された兵力を結集しました
アレクサンダー王と再び戦うために

1188 皇帝は王国に御触れを出しました

敢えて残るものは誰もいないようにと
そして皆一箇所に来るように命じました
というのは彼は死ぬか復讐するかしたかったからです

1189 皇帝は最初よりももっとずっと多い大きな兵力を集めました

アラブ人、トルコ人、中国人と呼ばれる他の者たち
バクトリア人と一番遠方の野蛮人たち
そしてスキタイ人、世界に彼らほどの戦士はいません

1190 そこにはエチオピア人とカナン人もいました

バビロニアの地の人々が、すべてのカルデア人と共に
メディアの地からはペルシャ人とシバの人々が
そして競技会でよく振る舞うことを知っているパルティアの人々
がいました

- 1191 二つのインドは、小さい方と大きい方の⁹⁹⁾
その端にだけ皇帝がいました
ポロはそこの長で君主でした
彼は非常に勇敢で、富んでいて、物知りでした
- 1192 ポロはこのことに加え、ダリウスに自分の兵士を送りました
十万以上の優秀な戦士を
彼らは皆すっかり準備ができていて、皆髭の生え始めた若者でした
皆良い家柄で、高貴な一族の出です
- 1193 そこには私たちがあなたたちに言わなかった多くの民がいました
大きなそして多くの領土を語ることはできないでしょう
しかしヒルカニア人¹⁰⁰⁾については不公平になります
もしそのような人たちに私たちが言及しないなら
- 1194 ダリウスは己が名誉に懸けて命じました
誰も残ることのないように、牧童頭も羊飼日も
町人も農夫も
どんな仕事の職人も
- 1195 アレクサンダーがこのように多くの民を見ると
丘も平地も埋め尽くしていたのですが
言いました：《友たちよ、我々は勇気を持って戦う必要がある
インド人や異教徒たちが我々に向ってきているのだから

- 1196 我々が殺した一人につき、百人以上が生まれた
あるいは決して死ななかった者たちは皆息を吹き返した
私は作者たちはこのことを理解したことと思う
蛇の頭¹⁰¹⁾について述べた時に
- 1197 多くの馬鹿げた事を語っている著者たちは物語っている
七つの頭を持った蛇がいて
一つが切り取られると頑丈な七つが生えてきたと
この話と同じようだ
- 1198 格闘家アンテオ¹⁰²⁾はこのような力を持っていた
投げ飛ばされれば投げ飛ばされるほど、より強くなるという
しかし彼と戦ったヘラクレスがそれを阻止した
ダリウスは今同じ事をしようとしているようだ》
- 1199 こうしている内にギリシャ人たちはすでにユーフラテス河を渡っ
て
アブラ¹⁰³⁾と呼ばれる山脈の近くに来ていました
ダリウスは約一日の近いところにいました
しかし間にある場所はしっかり護られていました
- 1200 太陽は沈み、暗くなりかけていました
月は満ちていて、昇ろうとしていました
人々は皆帰り始めました
ある者は寝るために、他の者は食事のために

- 1201 寝るにはまだそんなに静まってはいませんでした
—彼らのうちある者は夕食中で、他の者は済ましていました—
彼らは月が色を変えたのを見ました¹⁰⁴⁾
それで身分の低い者も高い者もひどく驚きました
- 1202 最初は黒くなり、明るさがなくなり
その闇が長い間続きました
それから別の色調の赤になりました
彼らは言いました：《これはきっと多くの死者が出る印だ》
- 1203 身分の低い者も、高い者もひどく動揺して
皆絶望しました
彼らは言いました：《ああ、みじめなものだ、我々は何と運がわるいんだ
我々の重大な罪が我々をここに導いたのだ¹⁰⁵⁾》
- 1204 彼らは言いました：《アレクサンダー王よ、あなたは決して生まれるべきではなかったでしょう
というのはあなたは世界中と戦争をしたがる
あなたは天も地も従えたい
神の望まないものをあなたは手に入れようとしている
- 1205 我々は考えたこともなかったほどのものを手に入れ
征服すればするほど、もっと欲しくなった
我々は非常に傲慢になり、節度をわきまえない
さらに求めるものを手に入れようとしている

- 1206 我々は多くのことをしたので神々は怒っている
太陽も月も我々には満足していない
これらの印は皆我々の罪故である
神々が敵対して来たら、我々は苦悩するだろう》
- 1207 諸王に恐れられ、毅然としたアレクサンダーは
どんな危険にも決してひるんだことがなかったのですが
不満が沸き起こったのを知りました
そして人々がどんなに動揺しているかも
- 1208 アレクサンダーは自然を知っている学者たちを来させるように命
じました
そして印とはっきりしないことも知っている学者たちを
そして彼らに命じました、書物から判断するようにと
これらの姿が何の印を表しているのかを
- 1209 他の者に混じって素晴らしい学者がいました
名をアリスタンデルと言ってエジプト生まれの者でした
より深い学識があったので他の者たちは不要で
話すととても良く理解できました
- 1210 話し始めると、人々はじっと耳を傾けました
《皆さん—彼は言いました—、私はとても驚いています
こんなに素晴らしく生来賢明な人々が
こんな明白なことで、こんなに困っているなんて

- 1211 山に住んでいる羊飼いでそんなことは知っています
そして著者たちもそのように私たちに書き伝えています
すべての被造物は創造主に仕え
己が道を辿ってその掟に従うことを
- 1212 太陽も月も星も道を外れません
そこに初めに据えられたのです
少しでも高くなったり、低くなったりしません
わずかでもその性質を変えたりしません
- 1213 出も入りも
すべての運行における回転も回帰も
空の星は、小さいものも大きいものも
創造された時のコースを運行します
- 1214 しかしそれらすべての中で一番大きいのは太陽です
そこから他の星々は光や輝きを取っています
一番光が届く星はより大きな光を放ち
あまり届かない星は少ない明るさです
- 1215 このことにさらに確かな説明をしたいと思います
太陽が朝早く昇ると
月や星々はすべての光を失います
それらの一つとして現れません

- 1216 それらが閉じ込められているわけではなく
太陽の光がそれらを抑え付けているのです
太陽が過ぎ去ると、直ちに活気付き
現れて輝きます、銀のようです
- 1217 このことはロウソクにおいて見ることができます
一番大きいものが小さいものから力を奪います
近くになくとも、それを弱めます
しかしそれは結局自分の任務を果たします
- 1218 さらにあなたたちに他の論拠を示しましょう
新月が西の空に現れる時
下弦の月が東の空に現れる時でも
すべてはそこにある太陽からやって来ます
- 1219 月は太陽の近くにあると、その勢いを失います
それを見る人々はからだと言います
それから太陽は離れて行き、月は日ごとにその姿を現していきま
す
壮麗な満月になるまで
- 1220 満月になると太陽はより近づいていき
非常な力で月の光を妨げます
日に日に月は欠けて行き
—愚か者は痩せていっていると思います—

- 1221 私はまだあなたたちに一つの疑問を解いてあげたい
それは多くの者が時々疑問に思うことです
太陽が沈んで地球の下¹⁰⁶⁾の位置に来た時
どうして夜に月を照らすことができるのでしょうか
- 1222 確かに月は地球よりも大きい
それで地上のどこからでも同じに見えます
太陽は七倍の大きさで—これは間違いありません—
月よりもずっと高いところにあります
- 1223 この道理によると、私たちは理解することができます
月が太陽から隠れることはできないということを
どこにあっても両者はお互いをはっきり見ることができます
地はそれらに全然邪魔することはできません
- 1224 太陽と地の間を月は回っています
月が太陽と同時に一直線に並ぶことがあります
その時太陽の明るさが減じます
その減少が食と呼ばれています
- 1225 太陽はすぐにその点を通過し
全力で直ちに力を回復します
愚かな民は驚きます
自然を知らないので、ひどく怯えるのです

- 1226 このことは月から判断すべきです
太陽が地の下に沈み東に戻ろうとする時
月は一直線に並びますが、長くその状態を続けることはできず
自分の輝きを変えることになります
- 1227 それで太陽が境界線を越えるとすぐ
月がその本来の輝きで戻って来ます
愚かな民はそれが不吉な印だと思い
そしてあなたたちはそんなに怯えたのです
- 1228 さらにこのことは他の場合でも起こります
太陽が沈み、地平線の下に来る時
地の影が間に入り
それで少しの間月は光を失います
- 1229 さらに別の説明をあなたたちにしましょう
あなたたちがどんな害も恐れないように
太陽はギリシャ人のもので—何故だか理由をお話ししましょう—
月は東方にいる野蛮人のものです
- 1230 月が兆候を示すために形を変えると、
彼らに大きな艱難が来る恐れがあります
もし太陽が乱れるようなことがあったなら、私達は
恐れるべきでしょう
しかしこの事で私達は喜びを示すべきでしょう

- 1231 黒色は過去の苦しみを示しています
私達から奪った者達は、その事で苦しんでいます
赤色は彼らが明日敗北するだろうことを示しています
彼らは多くの血を失い、私達は名誉を得るでしょう》
- 1232 皆が満足し、雑音は止み
師アリスタンデルは皆に信じられました
人々は彼の話しに熱狂し
聞いたことによって大きな勇気が彼らに生まれました
- 1233 華々しい戦果を誇るアレクサンダー王は
皆が活気付いているのを見ると
人々に、彼らに恐れられた民に進軍するように命じました
そして勇者として戦いに赴くように
- 1234 皆軍旗を立てて進み
整えられた軍はダリオ王にまっすぐ向かって行き
貢ぎ物のお返しをしようとしていました
それはずっと以前から収奪されたものでした
- 1235 捕らわれていたダリオ王の妻は
夫と家族を心配し
これを見ると、心臓が張り裂け
瞬く間に魂が抜け出ました

- 1236 アレクサンダーは悲しみ、号泣しました
—自分の母親のためにもこうはしないかったでしょう—
急いでマントで彼女の顔を拭い
悲しみのため軍事行動を少し延期しました
- 1237 アレクサンダーは非常に適切に悲しみを表したので
他の者達も涙をこらえることができませんでした
ギリシャ人達は思い切り泣きました
彼女は自分の国でもこれ以上の名誉は与えられなかったでしょう
- 1238 遺体は多くの人によって警護され
直ちに貴重な塗り薬で防腐処置が施されました
アレクサンダー王は彼女に非常な敬意を払ったので
彼女の葬儀は十五日間続きました
- 1239 著名な職人でヘブライ人であるアベレスが
彼ほど腕の立つ者はいませんでした
貴重な大理石で墓を彫りました
—彼自身それを仕上げたとき驚いていました—
- 1240 彼はそこにかつて起こったすべての物語を描きました
天国の天使がどのように墮落したのか
我々の最初の両親がどのように不幸な目にあったのか
禁止に逆らってリンゴを食べたために

- 1241 族長ノアはもっと先の方に描かれていました
箱舟が着いたアルメニアの山々¹⁰⁷⁾
各々自分の地域にいるセム、ハム、ヤペテ¹⁰⁸⁾
混乱した巨人たちと高い塔¹⁰⁹⁾
- 1242 カトリック教徒アブラハムと彼の近くにイサク¹⁰¹⁰⁾
イスラエルの子等十二支族すべて
エジプトのわざわいと残酷な天使
羊の血で戸口に書かれたタウの文字¹¹¹⁾
- 1243 海にできた道とファラオの死
どのようにして民がアロンに王になってくれと頼んだか
族長モーセがどのように律法をさずかったか¹¹²⁾
ダタンとアビロンがどのように地に飲み込まれたか¹¹³⁾
- 1244 砂漠にいる間中何を食べて生きていたのか
幕屋はどんなだったのか、どのように覆われていたのか
すべてが非常に上手に、非常に正確に描かれていたので
人は皆開いた本で見るようだったでしょう
- 1245 他の図ではモーゼが死んで
代わりにヨシュアが治めていました
彼は人々を（約束の）地に導き、また十分に才能が与えられてい
ました
—今日彼は聖なる教会によって追悼されています—

- 1246 その地に預言者たちが集まっていました
皆手に板を持っていて、皆紋章がありました
それぞれが何を言ったのか、あるいはどんな時に
各々どの出身なのかなど書面に書いてありました
- 1247 ダビデはプサルテリウムを持って彼の詩篇を唱えていました
ソロモンは正しい判断をして神殿を建て
ロボアムは王国に分裂と党派をもたらしました
アペレスはその日で作品を終わらせていました
- 1248 異教徒たちの他の出来事が描かれていました
本当の事でなかったのが隅に描かれていました
話しがとても多く、素晴らしいものだったので
人々はアペレスの墓前で驚いていました
- 1249 アペレスが彫れるものを彫り終えた時
墓が4本の柱の上に建てられ
盛大な葬儀で遺体が収められました
アペレスの知性はいつまでも語り継がれるでしょう
- 1250 この時ダリウス王のところに宦官がやって来て
取り乱して悲痛な表情で彼に知らせを持ってきました
ダリウス王は彼がそんなに血相を変えてやって来るのを見て
何か凶事が起こったのが分かりました

- 1251 ダリウス王は彼にどんな知らせなのか言うように命じました
というのはその凶事がすべて王に関わることを知っていたからです
しかしその使者はあえて言おうとしませんでした
なぜなら彼はそれによって褒美がもらえないことを知っていたからです
- 1252 しかしながら結局王に隠すことはできませんでした
女王の死のことを言わなければなりませんでした
ダリウス王は言いました：《彼女は憎悪を甘受すること望まなかったのだ
それ故、他のことの故ではなく、死ぬことになったのだ》
- 1253 使者は言いました：《ご主人様、本当のことを知ってください
誰も彼女に残酷なことはしませんでした
アレクサンダー王はむしろ彼女にとっても大きな同情を示したので
あなた様でも彼女にそれ以上の情を示せなかったでしょう
- 1254 エンドロナ¹¹⁴⁾ は生きている間は侮辱されたことはありませんでした
アレクサンダー王は彼女に理不尽なことを言ったりしたりしたこともありませんでした
彼女が望んだことは拒まれたことはありませんでした
バビロニアで彼女ほど敬われた人はいなかったでしょう

- 1255 アレクサンダー王は彼女の死を驚くほど嘆きました
彼女に対して大いなる儀礼と哀悼の意を表し
彼女のために豪華で非常に美しい墓所を作りました
ご主人様、もし彼に不平をお持ちなら大変な過ちですよ》
- 1256 ダリウス王が状況を理解し
その善き王が途に就くと
とめどなく涙を流しながら
神に向かって手を上げて、このように祈りました
- 1257 《私たちがその手の中で死んだり生きたりする主よ
あなたは自由な者を捕らえ、囚われ人を解放します
そして金持ちを圧迫し、貧乏人を持ち上げます
私を見捨てないでください、強大な隣人がいるので
- 1258 しかしもしあなたの判断で、命じられているなら
私と私の血筋の者が王国を失うと
主よ、この不幸な者を哀れんでください
そしてそれを完璧な王であるこの男アレクサンダーに与えてくだ
さい》
- 1259 ダリウス王は高潔な騎士である彼の王子の中から十人を呼びまし
た
彼らをアレクサンダー大王のもとに送り、使者にしたのです
彼は大王と和平を、真の協定をむすび
捕虜のために大金を支払いたかったのです

- 1260 その中で一番年上で、もっとも高潔なアキラスが
彼は優れた容姿で年も中年になっていましたが
公正な大王の前で彼の申し立てをしました
しかし彼が話してもあまり得るところはありませんでした
- 1261 彼は言いました：《偉大なアレクサンダー王様、
あなたは非常に幸運なお方です、創造主があなたを導いておられ
ます
もし神があなたにそのような素晴らしい騎士道の美德を授けられた
のなら
あなたはもっとも優れた者たちの優位性を知るべきでしょう
- 1262 ダリウスはあなたとの好み^{よし}を確かなものにしたいと望んでいます
それを恐れからではなく己の満足のために望んでいます
彼はあなたが何か要求することを願っています
なぜならあなたは王妃にあのように名誉を与えること望んだので
すから
- 1263 彼は自分の娘をあなたに与えることを望んでいます、そしてそれ
はいい結婚です
あなたはそのような申し出に満足しなくてははいけません
彼は自分の帝国から百以上の町をあなたに与えようとしています
このことで彼はあなたとの安定した友好を築けるでしょう

- 1264 ダリウスは母親と息子たちを解放するように望んでいます
 その代わり彼はあなたに十万タラント¹¹⁵⁾の純金を払うことを望
 んでいます
 あなたにとってはその金を受け取るほうが良いことです
 捕虜に配慮するより
- 1265 あなたは寛大さで我々から多くを得たのです
 女王にあのように敬意を払った時に
 あなたは我々ダリウスのすべての家臣に貸しを作りました
 私の考えでは皆があなたに満足しています
- 1266 もしそうでなかったら、一我々は確信しているのですが—
 あなたとあなたの騎士たちは戦場にあったでしょう
 そしてプシファルは軽快に飛び跳ね
 我々は最初の打撃を押し返していたでしょう
- 1267 もしあなたが別の振る舞いをしようとするなら、それは誤りでし
 ょう
 ダリウス王は強大な武力を持っていて
 極めて大勢の人々を集めています
 あなたが勝ち得た名誉を取り上げさせるでしょう》
- 1268 アキラスが話し終わると
 アレクサンダー王は貴族の諮問会議に意見を求め
 適切な助言をするように要求しました
 かの伝言に対してどんな返答をしたらいのか

- 1269 全宮廷が沈黙しました、十二人の貴族も皆
皆が修道院の修道士たちのように沈黙を保っていて
自分の意見を敢えて言う者は誰もいませんでした
というのはアレクサンダーが彼らをこのような事で困惑させてい
たからです
- 1270 事は重大で、大変なことです君主に助言するのは
君主が満足しない時は、不機嫌に言い返すのですから
その上、たまたま何か間違いがあると
非難はすべて助言者に降りかかるのです
- 1271 パルメニオはアレクサンダーに答えて、何か言おうとしました
しかし黙っている方が彼に得策だったのでしょうか
なぜなら剣を振り回す方が良かったからです
理屈を言ったり、助言を与えるよりは
- 1272 《ご主人様—とパリメニオは言いました—私達はこんなにあなた
を恐れているので
私達の考えていることを敢えて申し上げます
あなたが気に入らなければ、厳しく叱責されるからです
あなたの目の前にいる私達は皆、だから黙っているのです

- 1273 しかし私はあなたに助言したいと思っています
あなたはダリウスの娘以上に価値のある夫人とは結婚できないで
しょう
その上、平和裡にこのような広大な土地を手に入れることは良い
ことでしょう
いつまでも私達が戦争を続けなくても良いように
- 1274 二番目にあなたに言いたいことがあります
あなたに平和を求める者は敢えて戦争はしません
もしあなたが正しく行動したいなら、ダリウスに平和を与えるべ
きです
そのことはあなたの名誉と満足になりますから
- 1275 私達がここに連れて来くる囚われた人々については
私達には他に益がない出費と大きな困難です
死者やら逃亡者やらで私達はわずかになりました
間も無く私達はさらにもっと少なくなるでしょう
- 1276 私達は女と子供を連れています
彼らは手ぶらで、私達は荷を負っています
私はこのことで彼らが私達に大きな恩義を感じてもいいと思っ
ています
もし私達がこのような荷から彼らを解放しているとしたら

- 1277 ご主人様、もしお望みでしたら、道理があるかと思われます
あなたがこの身代金で捕虜を解放することが
そしてあなたは大きな負担をしなければならないのですから
解放することによって大きな利益が得られるでしょう
- 1278 死んだ者達や逃げ他者達は
もし金に換算されるなら
そんなに無益に失ったことにはならないでしょう
それでも私達は皆不満ですが
- 1279 ご主人様、あなたは私の助言をすべてお聞きになり
私があなたに心から助言しているとお知りおきください
もし、あなたはずっと賢いお方ですから、別の考えをお持ちなら
私は直ちに従います》
- 1280 その貴族の助言はちゃんと聞き入れられませんでした
王はそれをこきおろし、あまり感謝はしませんでした
王は彼に言いました：《お前のようにになってしまうだろう
もしその助言に私が賛同すれば
- 1281 そのような婦人を娶れば私にとってとんでもない名誉となるだろ
う
以前彼らは彼女をマセオス¹¹⁶⁾と結婚させようとしたのだ
そのような助言を君主にすることのできる者は
人前で話す恥を知るべきだ

- 1282 ダリウスが私に提供している土地は私が獲得したものだ
お前達皆と力を合わせ、正義の剣で
むしろ大変なことだろう、それを奪い返すことは
彼が私に約束しているすべての内で、彼のものは何もない
- 1283 その上、もし私が彼の手からわずかでも取れば
名誉もすべての手柄も彼のものになり
私のすべての戦功は無価値になるだろう
それ故お前達の助言は何の意味も持たないだろう
- 1284 もし彼の帝国をすべて私に残そうとしても
私はそのような形では受け取らないだろう
なぜなら私は、彼の意に大いに反して、神を信賴しているので
私達の最良の栄光でそれを勝ち取ることができるだろうから
- 1285 ダリウスの息子と娘達と母親は
金で返してやるのは侮辱だろう
というのは私は商人でもないし、そのことで報酬をもらってもい
ない
私は非常に才知ある王達の血筋である
- 1286 高貴さは決して商取引に関与しようとはしなかった
終わったことには面白さはない
彼に喜んで返してやる方が良いと思う
金をもらっても私がもっと豊かにはならないだろう》

- 1287 アレクサンダー王は使者たちに自分の前にくるように命じました
彼らにお金を与え、良い服を着るように命じました
《聞いてくれーと彼は言いましたー、友たちよ、私がお前達に言
いたいことを
おまえ達が私に言ったことに私は答えない
- 1288 私が女王に敬意を表したとしたら
それは恐れからでも愛情からでもない
そうする義務があると思っているからだ
もしそうしなければ、大きな過ちを犯すことになるだろう
- 1289 ダリウスが私に約束しているものに感謝はしない
彼は私を締め付けようとしているが、私は日々成長する
毎日私の心は新鮮になる
彼はまだ私がどんな針で釣りをするか知らない
- 1290 ダリウスが私に差し出すものはすべて私のものだと思っている
私に従わない者は愚か者だと思う
しかしもし神が望むなら、私は神を信頼しているので、
その者にネコをここから川に連れて行かせよう¹¹⁷⁾
- 1291 囚われている彼のすべての家来どもを
代償なしに送り返したいと思う
私の持ち物から身代金を取ろうとはおもわない
この答えを持ってダリウスのもとに帰るが良い》

- 1292 ダリウスはこの間自分の事を準備していました
巨大ですばらしい軍を展開していたのです
しかし彼の運命は不確かなものでした
危険な時が近づいていたからです
- 1293 たとえどんなことが起ろうと、彼は意気軒昂でした
彼にとっては死は苦痛ではなかったでしょう、ただ良い
死に方をしさえすれば
神が彼を受け入れてくれれば、死は彼には良きものでしょう
大きな苦悩や大きな災いが彼に降りかかる前に
- 1294 一方アレクサンダー王は
すばらしい家臣達を持っていて
彼らは精神も武器もしっかり備えた者達でした
どんな武力によってもたやすく破られることはないでしょう
- 1295 王はただちに前進し、攻撃するように命じ
角笛を吹きラッパを鳴らすように命じました
人々は自分たち自身非常に興奮していたので
ずっと前に喜んで前進していたでしょう
- 1296 ギリシャ軍は戦意を持って
勝利する自信満々だったので
天幕も張らなかったし、野営しようとしませんでした
敵が近くに来るまでは

- 1297 すでに両王がお互い目に見える所まで来ていました
—両者は以前会ったことがあるので互いによく知っていました—
その時はダリウスはもっと多くの象を連れていました
最初の時連れていた騎兵よりも
- 1298 ギリシャ人たちは殺気立っていたので
—その上生来非常に勇敢だったのですが—
しきりにペルシャ人達をただちに攻撃しに行くこうとしました
しかし王は彼らを落ち着かせました
- 1299 昼を過ぎ、太陽が沈もうとしていて
戦闘を始めるには不適當でした
夜になって、彼らが散り散りになってしまうからです
彼らに打ち勝っても、追い詰めることはできないでしょう
- 1300 両軍からすごい音がしていました
角笛とラッパと叫び声です
山々と空が揺らぎ
自然の調子が狂ったようでした
- 1301 太陽はその行路をたどり、すでに海に没しました
人々は戻って、夕食を取ることを考えていて
馬にも餌ををやろうとしていました
朝になれば戦闘に加わることになっていたのだ

- 1302 傑出したアレクサンダーは、日が暮れると
愛馬で全軍を視察し
各々が自分の場所で夜を明かすように命じました
翌日にはすべて片がついているでしょうから
- 1303 視察の後、自分の寢床に帰り
一疲れを知らない頑丈な人間などいないでしょう—
落ち着くために少し眠ろうとしました
しかし気持が高ぶっていたのでかないませんでした
- 1304 いろいろな考えが心を巡っていました
全然眠ろうと思いませんでした
一睡もしないほど心は乱れていました
眠らない男のように非常に憔悴して横たわっていました
- 1305 このように鶏が鳴くまで横たわっていました
ビトリア夫人¹¹⁸⁾が心配を取り去って行ってくれ
非常に疲れていた手足が休まり
ぐっすり眠り、目が癒されました
- 1306 すでに朝課の鐘¹¹⁹⁾を鳴らす時刻になろうとしていました
明けの明星が現れようとしており
悪く暗い日が明けようとしていました
多くの血が流されることになるでしょう

- 1307 太陽もできることなら遅れて出たかったのです
そんなのに大きな不幸を妨げようと
しかし従順さを破ることができませんでした
弱々しく不本意に顔を出し始めました
- 1308 皇帝ダリウスは
最初の会戦から、非常に懲りていたので
日の出前から武具を身につけ
ギリシャ人たちを攻撃するために準備ができていました
- 1309 一晩中軍を見回っていました
襲撃してきたら、騙されないようにと
起ることすべてを予測していました
ギリシャ人たちがパルメニオの言う事を聞いたとしたら
- 1310 非常に恐れられた男アレクサンダー王は
前夜自分の隊長たちと話しました
戦闘のことについて彼らに質問したのです
注意深くどのようにそれに臨んだらいいのかを
- 1311 彼らは以前叱られたので
誰も答えることなく、黙っていました
しかしだいぶ時間が経って
パルメニオが非常に落ち着いた言葉で王に答えました

- 1312 《王様、幸いにも私はこのように恵まれています
あなたにいくら助言しても、決して聞いてもらえません
結局私はあなたに気に入られていないのです
しかし私が考えてきたことを申し上げたい
- 1313 ダリウスの軍勢は途方もなく巨大です
最初の戦闘に恐れをなして、広いところへ移りました
というのは前は狭さが彼らに重大な過ちを犯させたからです
(今度は) 戦闘に当たって用心深さと分別を示しています
- 1314 百人対一人です、我々は彼らを包囲できないでしょう
彼らが逃げないとしても、我々は殺し疲れるでしょう
彼らは準備ができていますので、怖気させることはできないでしょう
う
我々の考えていることを達成するのは難しいでしょう
- 1315 その上そこには恐ろしく図体の大きな人たちが来ます
犬のような顔で、瀝青のように黒い人たちです
勇気と軽快さで
多くの人を怯えさせるでしょう、これはたやすいことでしょう
- 1316 さらに、彼らも知っての通り、もし負けたら
荒地も村も役に立たなくなるでしょう
彼らは戦場で首を落とされる方がましでしょう
外国人にひどい侮辱を受けるよりは

- 1317 しかし皆が氣にしているのなら、一つ考えがあります
日が暮れるとすぐに彼らを攻撃するのです
彼らはどこにしようと打ち破られ
逃げられる所はどこへでも逃げるでしょう
- 1318 彼らは多くの土地から、多くの辺境から来ていて
同じ習慣も同じ言葉も持っていません
彼ら同士で言っていることが分からないで
豚のように一斉に倒れるでしょう
- 1319 彼らには取り決めも指揮系統も全然ないでしょう
我々のたった一人が百人以上を倒すでしょう
我々は望み通り我々の事を行うだけです
分別をもってこの事をあなたに申し上げます、私がウソをついて
いないことは神がご存知です》
- 1320 パルメニオの言った事は会議を非常に喜ばせました
皆がそれは適切な助言だと思いました
しかしアレクサンダー王は喜びませんでした
ただちに自分は不満足であることを示しました
- 1321 王は言いました：《私には大した道理があるとは思えない
このようなごまかしは盗人の手口だ
あるいは勇気のない臆病者のすることだ
さらに言えばほとんど裏切り行為に思える

- 1322 またそのような方法でダリウスに勝ちたくはない
彼が負けるか、私が非常な恥をかくかだ
私の臆病さは語り草になるだろう
これは私の名声をひどくおとしめるだろう
- 1323 欺きや待ち伏せは決して王に相応しいものではなかった
そのような戦いに一度も快勝はなかった
ダリウスとその一党はそれを言い訳にしてくる
ここにすぐに評価が下がる我々の勝利がある
- 1324 その上、他の事だが、彼らは非常に用心深い
皆盾と鎧を帯びている
我々が動くとすぐに気付かれるだろう
彼らは口が利けなくとも雄弁になるだろう
- 1325 しかし明日明るくなったら彼らを攻撃しに行こう
腕の立つ者はそこで分かるだろう
各々どんなだかそこで見分けがつくだろう
我々は後退することなく進むだろう、我々が勝つことを私は知っ
ているのだから
- 1326 ダリウスがこれをすべて通り抜ければ
この上なく用心深くなり
誰も力で彼に挑むことはできないだろう
しかし不運は払いのけることはできないだろう》

- 1327 日が昇り人々は起きていました
アレクサンダー王はまだ寝ていました
徹夜でひどく疲れていたのです
放っておけばもっと寝ていたでしょう
- 1328 人々は起きる時間だと知っていましたが
誰も王の天幕にあえて入ろうとしませんでした
パルメニオは彼らに朝食を取りに行くように勧めました
その後で武具をつけるのに都合が良かったからでしょう
- 1329 彼らは急いで食事をとり、すぐに戻って来て
半時間経たないうちに全員武具を身につけました
彼らは心配して王を待っていました
そんなに寝ていて困惑していたからです
- 1330 すでにダリウスの軍は隊列を整え移動を始めていて
天幕から遠く離れていました
彼らは大声や叫び声をあげ、大音響を立てていました
ギリシャ人たちは気持ちをぐっと抑えて、あえて打って出ようと
しませんでした
- 1331 ギリシャ人たちはアレクサンダー王の命令なしに馬で乗り出すこ
とを恐れていました
彼を起こすことも彼に近づくこともあえてしようとしませんでした
た
非常に迷っていて、どこへ向かったらいいか分かりませんでした

彼らの内のある者たちは王が彼らを試そうとしているのではないかと恐れていました

- 1332 こうしているとパルメニオが態度を変え
王の天幕に入り、彼を起こそうとしました
《ご主人様—と彼は言いました—、もう昼です、第三時¹²⁰⁾を過ぎようとしています
すでにダリウスの手の者たちが我々の天幕に近づこうとしています

- 1333 こんなにいつまでも寝ている時ではありません
馬にまたがって彼らを攻撃するように命じてください
彼らは我々があえて彼らを攻めようとは思っていないと思っています
ご主人様、私のしたことをお許してください》

- 1334 王は微笑んで、彼に振り向いて言いました：
《パルメニオ、お前に本当のことを知ってほしい、私はお前にウソを言うべきではない
私は明け方まで眠れなかった
それですぐには目覚められなかったのだ

- 1335 その上我々が何を心配しているのか私は分からない
ダリウスがこんなに近くに迫っていても
なぜなら彼が逃げようとしても、我々は放っておかないからだろうから
我々が以前に失った物を、ここで取り返すだろう

- 1336 以前はとても嘆かわしい状態だった
彼が隠れていて見つけれなかった時には
しかしどうか馬に乗って打って出ることを考えてくれ
彼らを攻撃して休息を与えないようにしよう》
- 1337 最初の戦いの時のように軍が配置されました
しっかりした側面と強力な後衛です
しかし前衛はさらに良いものでした
なぜならそこにアレクサンダー王がいたからです
- 1338 月は花の咲く五月で
野は様々な色に飾られていました
二人の皇帝が戦場で相見えました
そのような二人も、さらに大物も相見えたことはありませんでした
- 1339 神に愛された子である預言者ダニエルは
バビロニアにあって預言¹²¹⁾しました
よく馴らされていないヤギが山に来て
双角の羊の角を砕くだろうと
- 1340 このヤギは素晴らしい功績を持つアレクサンダーのことで
ダリウスは二つの王国を持つ羊でした
なぜならペルシャとメディアは二つの立派な王国でしたから
両方ともダリウスが治めていましたが打ち砕かれました

- 1341 アレクサンダーがペルシャの大軍を見たとき
不快に思い歯ぎしりを始めました
彼は臣下たちに言いました：《友そして親戚たちよ、
私はお前たちに伝えたい、注意せよ
- 1342 お前たちは非常に素晴らしい戦いを十分にしてきた
すでにお前たちのことは世界中に鳴り響いている
すべての土地が我々に対して結託している
そこで我々は剣を持つ必要がある
- 1343 今我々は男であることを誇るべきだ
世界中と戦おうとしている時に
少数の我が軍は、敵は多数なので、誇りに思うことができるだろ
う
人々は世々に至るまで我々を語り草にするだろう
- 1344 彼らは莫大な富と多くの財宝を持っている
腕があればすべてが我々のものになる
友たち、兄弟たちよ、私はその一部が欲しいのではない
生還した者は決して貧しくならないだろう》
- 1345 アレクサンダーは話し終わると
ダリウスと戦うために振り返りました
敵方の密偵がやって来て
王に強力な待ち伏せを知らせました

- 1346 彼は王にダリウスが道に
三本歯の先が鋼鉄の釘を撒いたと言いました
馬を殺し、歩兵たちを傷つけるように
気を付けなければひどいことになるだろうと
- 1347 彼は他のことも言いました、ダリウスは前衛に
厚い板でできた十万の戦車を配置して
それらは仕掛けで水車よりもよく動き
すべて剪定用の鎌のようによく切れると ¹²²⁾
- 1348 アレクサンダー王が敵のすべての策略を知ると
彼の傑出した軍を右に回るように命じました
そして自ら軍を森の中を導き
ダリウスが気付いた時には、彼は目の前にいました
- 1349 アレクサンダーが彼らに長い時間を与えようとしな
かったことをお知りおきください
槍を構えて、攻撃に移り
馬で全速力で彼らと対決しに行きました
最初に遭遇した男は不運でした
- 1350 アリストモネス王子は―彼はインドで育ったのですが―
アレクサンダーが非常に力強く、非常に怒ってやって来るのを見
ると
毅然として勇敢に迎え出て
盾に襲いかかり、大きな穴を開けました

- 1351 アレクサンダーの鎧は名匠が作ったもので
ガラスのように白い上質の鋼鉄でできていました
それは良い主人を持っていたので、とても忠実でした
怪我のないよう彼の体を護りました
- 1352 アリストモネスは体が大きかったので
大きな象に乗って現れました
脇と前方を塔に囲まれて
人は今までこんなにすざましい戦士を見たことがありませんでした
- 1353 アレクサンダー王はこの対決の終わらせ方をよく知っていました
相手の体まで迫れないのを見ると
象の右の脇腹を攻撃し
槍を反対側まで突き通しました
- 1354 象は重傷を負ったので
すぐに地面に倒れました
その巨人も塔ごと倒れました
山脈が動いたようでした
- 1355 アレクサンダーがアリストモネスが引き倒されたのを見ると
許そうとはせず、落ち着き払って
脇に持っていた剣を抜いて
彼が起き上がる前に首を切り落としました

- 1356 王オルカニデスーエジプトで生まれたのですがー
ともう一人シリアからやって来た勇敢な歩兵が
アレクサンダーにすぎましい攻撃をかけました
多くの攻撃を受けてきましたが、このようなものではありませんで
した
- 1357 しかし、あなた方にいくら話ししても、結局は運がアレクサン
ダーを助けて、両者を殺しました
その戦いでアレクサンダーは非常にめざましい攻撃を見せたので
人間がいる限り、それはいつまでも語り伝えられるでしょう
- 1358 すでに軍はすっかり入り乱れていました
矢が飛び剣が震えていました
地面は切り落とされた頭でいっぱいでした
多くの馬が手綱を断ち切られていました
- 1359 ダリウスの側の者たちは、指示されていたので
アレクサンダーを攻撃すべく一致していました
しかしギリシャ人たちは皆断固としていて勇敢だったので
家来たちの中でアレクサンダーを見分けることはできませんでし
た

- 1360 息子も父も皆非常に頑強に戦っていたので
皆がアレクサンダーのようでした
彼らが母親の違う息子たちには見えなかったことはお知りおきく
ださい
全員が忠実な仲間のようにでした
- 1361 しかし結局ペルシャ人たちはアレクサンダーを見つけました
彼が非常に激しい力で攻撃を加えていたが故に
千人以上が彼に襲いかかりました
—彼らは天幕にいる方がましでした—
- 1362 すでに彼らはアレクサンダーを苦悩と大きな苦しみに陥れていま
した
彼に否応なしに報いを受けさせようとしていたのです
しかしアレクサンダーに不運にも捕まった者は
二度と彼を苦しめようとしませんでした
- 1363 アレクサンダーの忠実な兵士フィロータスが彼を助けました
そのような戦いにおける並外れた仲介役です
彼はエヌスともう一人の騎士を倒しました
二人はわずかな時間で打ち破られました
- 1364 ダリウスの側に多くの人がいる中に
巨人がいました—書物にそう書いてあります—
黒人の父と大女の息子です
足から喉まで優に 30 コド¹²³⁾ がありました

- 1365 彼は銅を埋め込んだ棒を持っていて
それで多くの高潔な戦士が死んでいました
彼は一撃で彼らを倒すことができたのです
兜も鎖頭巾も何の役にも立ちませんでした
- 1366 彼は大胆だったので、悪魔に憑かれたように向かって来ました
アレクサンダーの盾に大打撃を加えるために
しかし王は毅然として準備を整えて待ち受けていました
巨人は望みを達することができませんでした
- 1367 彼は傲慢だったので、王に迫る前に
口汚く王を侮辱し始めました
彼は言いました：《アレクサンダーさん、あんたはさほど
大胆ではない
今日ダリウスから帝国を奪い取るほどには
- 1368 しかしあんたは幸運だと思わなければいけない
非常に立派な死を迎えることになるのだから
あんたはお気に入りの手にかかって死ぬことになるだろう
私はあんたが打ち破ってきた若者とは違うのだから
- 1369 私はバベルの塔を建てた戦士たちの一人だ
彼らは天の神々と戦っていた
あんたたちの重大な罪があんたたちを窮地に追い込んだ
ヘオンと対決させられた時に¹²⁴⁾》

- 1370 アレクサンダーは気違いじみた事を言ってると思いました
見栄から、騎士道精神からではなく言っていると
アレクサンダーは心の中で言いました：《創造主様、
私をお導きください
この傲慢さはあなたの気を重くさせるに違いありません》
- 1371 アレクサンダーは手に持っていた投げ槍を投げました
巨人の歯を狙い、投げつけると
それは傲慢なおしゃべりの口の真ん中に当たりました
—モーロ人もキリスト教徒もこれ以上ひどい骨を呑み込んだこと
はありませんでした—¹²⁵⁾
- 1372 ヘオンはからかいを止めました、重傷を負ったからです
残念だったのか嬉しかったのか、彼はすぐ倒れました
切り刻まれ、槍に吊るされ高く上げられました
—本当のところあなた方に言いますが、私はそのような攻撃に満
足しています—

注

- 99) 大インドはインドウスタン、小インドは主にインドシナを指す
100) Hircania (古代ペルシャ、マケドニア) の人、注 77 参照
101) ギリシャ神話に出てくるヒドラ (hidra) のこと
102) ギリシャ神話に出てくる大地の女神 Gea の息子 Antaeus
103) Arbela のことで、現在のイラクの北にある Erbil
104) 紀元前 331 年 9 月 20 日から 21 日にかけての月食
105) 原文 Pora qué...を他の多くの版のように、por aquí と解した
106) 地球が平面と思われていた時代のこと
107) ノアの洪水と箱舟の話 (旧約聖書創世記)

- 108) ノアの三人の息子たちで、「各々自分の地域」とはアジア、アフリカとヨーロッパ（同上）
- 109) バベルの塔（torre de Babel）のこと（同上）
- 110) ここも時代の混同、イサクはアブラハムの息子
- 111) 旧約聖書出エジプト記、タウはヘブライ語アルファベット最後の文字
- 112) 旧約聖書出エジプト記
- 113) 旧約聖書民数記 16、1-35
- 114) ダリウス王の妻 Estatira のことだと思われる
- 115) 古代ギリシャ・ローマの貨幣
- 116) 1017 参照
- 117) 「憂き目にあわせてやる」の意か
- 118) 勝利の女神ニケーのことで、「だんだん眠くなってきた」の意であろう
- 119) 早朝の祈りを知らせる鐘で、これも時代が混同されている
- 120) 大体現在の午前九時頃
- 121) 旧約聖書ダニエル書 8：20
- 122) 車輪から鎌のような刃が出ている
- 123) 1 コドは約 42 センチ（肘から中指の先までの長さ）であるが、コドには色々な長さが当てられている
- 124) ヘオン（Geón）はギリシャ神話の巨人たちの母、大地の女神 Gaia から出た形で、この連では旧約聖書とギリシャ神話がごた混ぜになっており、この Geón は巨人の一人を指している
- 125) これもずっと後世の Reconquista 時代の話になっている

参考図書・辞書

- Libro de Alexandre Real Academia Española Madrid 2014
- Libro de Alexandre Nueva Biblioteca de Erudición y Crítica
Editorial Castalia Madrid 2007
- Libro de Alejandro Editorial Castalia Madrid 1985
- Book of Alexander Peter Such and Richard Rabine Oxbow Books Oxford 2009
- Vocabulario de Libro de Alexandre Anejos del Boletín de la Real Academia Española Madrid 1976
- アレクサンドロスの書・アポロニオの書 橋本一郎 大学書林 1991
- Diccionario Medieval Español Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca 1986
- Diccionario de Castellano Antiguo Manuel Gutiérrez Tuñón Editorial Alfospolis 2002
- Tentative Dictionary of Medieval Spanish Lloyd A.Kasten and Florian The Hispanic Seminary of

Medieval Studies New York 2001

Larousse Universal Diccionario enciclopédico Librairie Larousse Paris 1968